

[展覧会随想 その3]

展示室内の写真撮影について

大和文華館の玄関に、「ご観覧に際しては次のことをお守り下さい」という立札があります。その中に「館内の写真撮影およびスケッチは自由です。但し三脚、画架、発光機および絵具を使用される場合は係員の許可を受けて下さい」という一項があります。

ふつう、美術館の入館者のかたの多くは、入口に書いてある注意事項などをゆっくり読まれない場合が多いのです。しかし、たまに読まれたかた、あるいは館内に「撮影禁止」の表示がないのを不審に思われたかたは、係員に対し、「ここでは展示品の写真を撮ってよいのですか」と聞かれるようです。そして撮影が自由だという答えがかえってくると、喜んで展示品の前で記念撮影したり、あるいはお気に入りの美術品をご自分の好きなようにカメラに収めたりしておられるようです。

ただし、フラッシュは他の観覧者の迷惑となるため、それを使うときは係員に相談していただき、近くに観客の姿のないときだけ、許可することになっています。また、当館でも撮影自由なのは年間7回程度の平常展のときだけで、毎年秋におこなう特別展の場合は、展示品のほとんどが他館、社寺、あるいは個人などからの拝借品となるため、館内の撮影は報道用などの特別な目的以外にはお断りしております。

しかし、館蔵品の平常陳列のときだけとはいえ、写真撮影の自由な当館は珍しい存在と言えるでしょう。ちなみに、日本のほとんどの美術館・博物館はまず館内での写真撮影を禁止していますし、国立博物館でも、写真撮影や模写をする人は、許可を受けるように表示されています。当館が珍しく模写や撮影が自由なのは、1960年秋

の開館以来の伝統です。初代の矢代幸雄館長は、欧米の美術館事情に詳しくあったため、日本の習慣がどうであつても、観客や研究者の便宜のために、模写や撮影を自由にしたそうです。

たしかに、欧米ではほとんどの博物館が、観客の手持ちでの写真撮影や簡単な模写を許可しています。私は今年の7月に一週間ほどロンドンに滞在しましたが、有名な大英博物館やナショナル・ギャラリーは、フラッシュ使用の写真撮影を認めていました。また、歴代の西洋絵画の蒐集で有名なコートルド・インスティテュート、及び中国陶磁を公開しているパーシヴァル・デヴィッド・ファウンデーションは、いずれもロンドン大学の付属施設ですが、ともにフラッシュを使わなければ撮影自由でした。

ただ、欧米の美術館や博物館のほとんどが館内の写真撮影を許可しており、また当館が日本では珍しく模写や撮影の自由な美術館であるからといって、私は何も他の日本の美術館や博物館に対し、ただちに模写や撮影を自由にせよというつもりは、毛頭ありません。日本人（特に知識階級を自任する人びと）は、何かというときすぐヨーロッパやアメリカを引合いに出しますが、日本には日本の事情があるからです。

たとえば、欧米の美術館では、展示のほとんどが、その館の所蔵品が主体で、日本の美術館のように借用品による特別展の機会が多くありません。一方、日本の美術館や博物館では、特別展が中心であるばかりでなく、平常陳列においても、所蔵品が不足しているため、展示の多くを社寺や個人からの寄託品に頼っています。そこで、自館の所有でない展示品の自由な

撮影を認めるわけにはいかないという事情があります。また、一般に日本では、真の意味での個人主義に基づく自由な市民道徳が未発達のため、公共の場所での個人の行為に、制限を加えなければならない場合もあるでしょう。私がある同業者から聞いた話ですが、撮影は許可するが、フラッシュの使用を禁止しているヨーロッパの美術館において、ピカピカ光を発生しているのは、まず日本人旅行者だそうです。

次に、日本で古美術品の彫刻（ほとんどは仏像）を鑑賞するとなると、まず観光客に公開されている寺院を訪ねなければなりません。仏像は美術品である前に、多く信仰の対象です。そこで、勝手にその撮影を許すことは、僧侶や敬虔な信者を不愉快にするに違いありません。それに、一体一体の仏像はそれ自体が仏ですから、みだりに信仰以外の対象とすべきでないというのももっともです。

これに対して、よくヨーロッパを訪れる日本人旅行者は、キリスト教の聖堂内部では撮影が自由だし、少なくとも断りさえすれば、写真を撮らせてくれるから、日本の寺院ももっと開放的になるべきだとよく言います。しかし、キリスト教は、たとえその現象形態がどうであれ、厳然たる一神教です。

そして、聖像や聖画は、信者がそれに向って祈りを捧げることがあっても、それ自体は決して神ではなく、信仰を高めるための手段（あるいは物質）にすぎないのです。ところが、仏像はそれを博物館などに陳列するとき、わざわざ僧侶が魂を抜くお経を唱えるほどですから、それ自体が仏なのです。こういう仏教とキリスト教との信仰形態のちがいを考えると、日本の寺院に対しみだりに観光客の撮影を自由にせよとは言えません。

とにかく、寺院はもとより、美術館や博物館にも、模写や撮影を簡単に許可できない事情があるでしょう。しかし、新しく開館した美術館であっても、特別な場合を除くと、ほとんどの館が撮影禁止にしている現実には接すると思います。十分に検討した結果、撮影禁止の規則が作られたのならば、問題はありません。しかし、私の思い違いでなければ、美術館というものはそういうものだという先入観にとらわれて、館内の模写や撮影を禁止している場合もきつとあると思います。いろいろな条件に照らし合わせて問題がないとき、日本の美術館の館員各位も、この禁止措置を再検討していただきたい、私は考えています。

(次長・成瀬不二雄)

ギリシア・バルテノンの破風彫刻を前にして 大英博物館にて(筆者撮影)

